# 会館だより

2018年　7月号

No. 349

公益財団法人　日中友好会館

# 目　次

## 行 事 案 内

### 《日中友好会館美術館》

・主催展
　日中平和友好条約締結 40 周年記念「宮廷のコバルトブルー 景徳鎮明清官窯復刻展」
・共催展「第 4 回上海工芸展 in 日本 上海絨繍画工芸展」
・貸美術館催事「日中平和友好条約締結 40 周年記念 第二回林石川作品展」

### 《日中友好後楽会》

・7 月談話会・懇親夕食会
・新規会員ご紹介

## 活 動 記 録

・日中友好促進懇談会
・後楽寮 春の写真と詩コンテスト
・「日中植林･植樹国際連帯事業」2018 年度中国社会科学院青年研究者代表団第 1 陣が来日
・「JENESYS プログラム（JENESYS2.0/JENESYS2017)」参加者の感想
・「JENESYS プログラム」アンケート

## 留 学 生 通 信

・「日本の長所と短所」　東京工業大学大学院博士課程（理工学研究科土木工学専攻）姚 超凡

## コ ラ ム

・「日中平和友好条約締結 40 年に思うこと」　(公財)日中友好会館 顧問　武田 勝年
・半瓶醋ー理事長のコラム「米中貿易交渉と米朝首脳会談」

## 会館行事と人の動き

## 表　紙

清・乾隆　／「礬紅龍鳳唐草文有蓋壺」

主催展
日中平和友好条約締結 40 周年記念「宮廷のコバルトブルー 景徳鎮明清官窯復刻展」より
詳しくは本誌 2 ページにて。

# ● 行 事 案 内 ●

## 日中友好会館美術館

### ◆主催展

**日中平和友好条約締結 40 周年記念**
**「宮廷のコバルトブルー**
**景徳鎮明清官窯復刻展」**

会　期：開催中～7 月 12 日㈭
　　＊月曜日休館

時　間：10:00～17:00

主　催：(公財)日中友好会館、景徳鎮市人民政府

共　催：景徳鎮創意城市弁公室

後　援：中華人民共和国駐日本国大使館、中国文化センター、(公社)日中友好協会、日本国際貿易促進協会、(一財)日本中国文化交流協会、日中友好議員連盟、(一財)日中経済協会

入場料：無料

＊開催概要は変更の可能性もございます。
お出掛けの前に会館 HP をご確認下さい。

現在、日中友好会館美術館にて「宮廷のコバルトブルー　景徳鎮明清官窯(かんよう)復刻展」を開催中です。

明・宣徳
「青花魚藻文葵口碗」
(底部)

中国陶磁器の発展には、宮廷・官用の御用器を制作する官窯の存在があったといわれています。明から清の時代にかけて、景徳鎮に“御器廠(ぎょきしょう)”とよばれる官窯が置かれます。この御器廠は工房としての役割のみならず、景徳鎮磁器の品質と生産量をコントロールする官署としての役割も担っていたとされ、この管理体制により景徳鎮磁器は飛躍的な発展を遂げます。

今日、世界の権威あるオークションで取引されている陶磁器の多くは、景徳鎮御器廠で焼成されたものです。

本展では、“宮廷のコバルトブルー”と題して時の皇帝達が愛した、中国が誇る永遠の美・青花(せいか)を中心に、古の技法に忠実に、悠久の時を越えて現代に甦った景徳鎮明清復刻磁器およそ 100 点を展示しております。初夏の候、優雅で華麗なブルーの世界をお楽しみください。

本展の会期は 7 月 12 日㈭までとなっております。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

明・成化
「青花豆彩鶏文杯」

### ◆共催展

**「第 4 回上海工芸展 in 日本**
**上海絨繍画工芸展」**

会　期：7 月 18 日㈬～7 月 24 日㈫

時　間：10:00～17:00
　　＊初日は 15:00 より開幕式

主　催：上海工芸美術博物館、上海工芸美術行業協会、(公財)日中友好会館

協　力：高橋絨繍館、上海工芸美術職業学院、PAOSNET 上海、上海工芸美術学会、上海市工芸美術デザイン協会、上海工芸美術研究所

後　援：中華人民共和国駐日本国大使館、中国文化センター、(公社)日中友好協会、日本国際貿易促進協会、(一財)日本中国文化交流協会、日中友好議員連盟、(一財)日中経済協会

入場料：無料

東洋の手工芸と西洋の芸術が融合し誕生した、「上海絨繍」の絨繍画を約 50 点展示します。「絨繍(ロンシュウ)」とは、100%ウールの毛糸を使って刺繍をする手工芸で、中国国家級無形文化遺産に登録されています。特に中国画、油絵、写真の表現性に優れていることから、「東方の油絵」とも称されています。

絨繍作品「星月夜」制作：嘉秀工芸

本展ではゴッホやフェルメール、クリムトなどの名画を絨繍で再現した作品や、中国の景勝地を絨繍で表現した作品など、多様な絨繍画がそろっています。上海絨繍を通して、“海派”文化芸術の一面をご紹介できればと思います。

また展覧期間中は絨繍体験教室を開催します。ぜひご参加下さい。

### ◆絨繍体験教室

日時：7 月 19 日㈭
14:00～16:00

上海から絨繍工芸士 2 名を講師に招き、パンダのミニ壁飾りを制作します！

※事前申込制、参加無料

（定員 16 名、小学生以上の方対象）

【申込み・問合せ】
文化事業部
電話：03-3815-5085　FAX：03-3811-5263
E-mail: bunka@jcfc.or.jp

## ◆貸美術館催事
## 「日中平和友好条約締結 40 周年記念 第二回林石川作品展」

会　期：7 月 27 日㈮～8 月 1 日㈬
時　間：10:00～17:00
＊初日は 14:00 から開幕式
主　催：第二回林石川作品展実行委員会
入場料：無料

日中平和友好条約締結 40 周年記念にあたり、林石川作品展を昨年に引き続き開催します。

林石川先生の作品は、中国伝統芸術に飽くなき追求心を持ち、新たな創作及び作品に表れている古典と現代が融合する水墨画には伝統を継承するだけでなく、弛まぬ努力を感じさせます。

【問合せ】
亜細亜国際交流 ㈱
電話：03-6804-6879

# 日中友好後楽会

## ◆7 月談話会・懇親夕食会

テーマ：「林羅山と湯島聖堂の孔子祭」

日　時：7 月 31 日㈫　17:00 より

会　場：日中友好会館地下 1 階大ホール

参加費：1,500 円(会員)
　　非会員の方はお問合せ下さい。

今回の談話会では、現在後楽寮生で東京大学東洋文化研究所にて特別研究員として中国史・東洋史を学ぶ、張哲さんを講師に迎え、「林羅山と湯島聖堂の孔子祭」というテーマでお話しいただきます。

会館からも程近い湯島聖堂は、徳川家康の代から四代にわたって幕府に仕えた儒学者・林羅山が上野忍ヶ岡の廷内に設けた先聖殿という孔子廟です。江戸幕府が儒教の学校として湯島に移築した後も、学問所としての伝統を受け継ぎ、近代教育発祥の地としての栄誉を担いました。今回は張さんから湯島聖堂が設立された歴史背景や、現在も毎年 4 月に行われている孔子を祀る祭典である釈奠について映像など交えてご紹介いただきます。

談話会後は、館内にて懇親夕食会を予定です。たくさんの皆様のご参加をお待ちしています。

## ◆新規会員ご紹介

2018 年 6 月ご入会
苅部　嘉仁さん

【申込み・問合せ】
後楽会事務局　緒方、堀口
電話：03-3811-5305　FAX：03-3811-5263
E-mail：kourakukai@jcfc.or.jp

# ● 活 動 記 録 ●

## ◆日中友好促進懇談会

5 月 12 日、北区日中友好協会主催による日中友好促進懇談会が北とぴあで行われ、後楽寮生と留学生事業部職員が参加しました。

参加者全員で

開会に先立ち、日中両国の国歌が流れました。まず北区長でもある花川與惣太会長の主催者挨拶、太田昭宏衆議院議員、北区議会榎本一議長、東京都日中友好協会の栗山眞之理事長のご祝辞がありました。そして来賓紹介の後、北区日中友好議員連盟の戸枝大幸会長の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。

懇親会で後楽寮生達は北区議員、日中の会員の方や北区在住の留学生達と和やかに交流していました。会の中盤には、苗族の衣裳を着た寮生の範馨元さんが葫蘆絲(ひょうたん笛)を演奏しました。初めて見る笛とその音色に参加者の皆さんは感心し、演奏後の範さんと写真を撮ったり質問をしたりしていました。

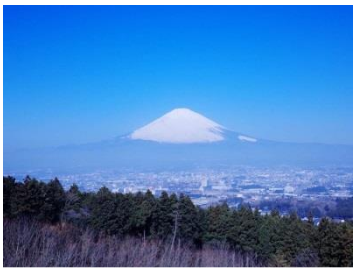
範さんの葫蘆絲(ひょうたん笛)

最後に、日中の参加者がステージに上がり、「大海啊故郷」を大合唱し、あっという間に懇談会が終了しました。　(留学生事業部)

## ◆後楽寮 春の写真と詩コンテスト

後楽寮寮生委員会が春をテーマに写真と詩コンテストを企画・実施しました。応募期間を経て、作品を後楽寮内に掲示し、投票を募りました。ここで入賞作品の一部をご紹介します。

≪写真の部≫



鄧燕平「富士之春」

汪子迪「新井中野通り」

≪詩の部≫

「春溪」　劉琦

罥烟柳依依，兰舟欲渡溪。
春水情脉脉，莺啼燕耳语。

「花怨」　劉琦

风吹云动日旖旎，花开燕来风和煦。
落花问情水无意，但自沉浮随缘去。

「花見四連句」　李筱硯

降りかかる 三毛の背中に 桜かな　千里山人
吹き飛ばす 花の死骸を 乗用車　後楽仙人
パーカ脱ぐ 落ちて来るは 花片々　西新散人
シャボン玉 破れては吹く 三歳児　後楽仙人

その他にも旅行先で撮った写真や日常生活を詠んだ詩など、たくさんの応募がありました。留学生の皆さんは日本の春を十分に味わって過ごせたようです。寮生委員会では寮生の皆さんが豊かな留学生活を送れるよう様々な活動を企画・実施しています。留学生事業部でも引き続き、皆さんの活動を応援していきたいと思います。　（留学生事業部）

## ◆「日中植林・植樹国際連帯事業」2018 年度中国社会科学院青年研究者代表団第 1 陣が来日

2018 年 5 月 20 日から 5 月 27 日までの 8 日間、中国社会科学院が派遣する 2018 年度中国社会科学院青年研究者代表団第 1 陣一行 24 名（団長＝田徳文 中国社会科学院国際合作局・副局長）が来日した。外務省が実施する「日中植林・植樹国際連帯事業」の一環として招聘した。

代表団は東京、宮城を訪問し、訪日テーマ「防災・環境」について、自治体や研究機関で専門家や研究者と意見交換を行ったほか、関連施設や NPO 等関連団体を訪問し、東日本大震災以降の日本の防災減災対策や防災教育について理解を深めた。また、宮城県気仙沼市で植樹活動に参加し、防災及び環境意識を高めるとともに、各地で歴史、自然、経済、先端技術など、日本に対する包括的な理解を深めた。

### 「自助・共助・公助」が一体となった日本の災害対策を学ぶ

代表団は、東京で渋谷区防災センターを訪問し、渋谷区危機管理対策部防災課から家庭、地域、区が一体となった震災対策の説明を受けた。また、首都直下地震等で発生する帰宅困難者に対応するための避難計画や IT 企業と連携した防災対策、区が独自で取り組む総合防災訓練イベント・防災フェスの紹介を受け、都市防災の問題や「自助・共助・公助」の考え方について学んだ。その後、東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センターの

関谷直也准教授より、「情報」を核に「減災」を目指す同センターの活動と、社会心理学からアプローチした災害時の情報伝達や風評被害に関するモニタリング調査結果に関する研究紹介を受け、意見交換を行った。

### 宮城で記念植樹や防災・環境プログラムに参加

宮城では、東北大学で文豪・魯迅が医学を学んだ階段教室を参観した後、災害科学国際研究所の島田明夫教授より、日本の防災関連法制の現状、及び大学院生らとのワークショップで判明した東日本大震災の実態に照らした災害法制の問題点と、改善すべき提言内容についてブリーフを受けた。また、震災後再建された仙台市南蒲生浄化センターを訪問し、津波対策と環境に配慮した最先端の下水浄化技術を学んだほか、甚大な津波被害を受けた沿岸の気仙沼市、石巻市を訪問、気仙沼・本吉広域防災センターでは地震・煙体験を通じ災害の恐ろしさを体感し、幼い頃から防災意識を涵養する日本の防災教育について理解を深めた。(公社)みらいサポート石巻では、語り部による震災講話を聞き、タブレットで被災当時の様子や石巻の過去・現在・未来を紹介しながら街を歩く津波伝承プログラムに参加、津波の脅威と未来に向けた復興事業についても理解を深めた。

東北大学災害科学国際研究所の島田明夫教授を囲み
魯迅が学んだ階段教室で記念撮影

続いて、気仙沼市階上地区にて、NPO 法人海べの森をつくろう会の協力のもと、津波被害を受けた農地で防災林再生の意味も込め、梅の苗木を 1 人 1 本ずつ記念植樹した。中国から日本に伝来した梅を植えたことは日中友好のみならず、震災の記憶を風化させず未来へ繋げる活動となり、団員にとって大変貴重な機会となった。

そのほか一行は、東京で浅草、皇居二重橋、湯島天神、TEPIA 先端技術館を視察・参観した。宮城では仙台市博物館・魯迅の碑や松島・五大堂を参観し、日本の多彩な魅力に触れることができた。

気仙沼市階上地区で被災地の復興と日中友好の
願いを梅の木に託して記念植樹

8 日間の訪日活動を通し、団員からは、「日本の防災は個人の自助とコミュニティにおける共助を重視しており、社会全体が一丸となって災害予防に取り組む姿勢は素晴らしい」「小さい頃から防災意識を高めるための防災教育がとても参考になった」「被災地に植樹できたことは有意義な経験だった」「災害復興において、物資面でのサポートのみならず、人々に配慮したソフト面の支援が更に大切だと感じた」など思い思いの感想が聞かれた。それぞれが今回の訪日で得た成果を今後の研究や生活に生かしていこうと強く意識する貴重な機会となったと思われる。

本団の受け入れにご協力下さった関係機関・関係者の皆様に、厚く御礼申し上げたい。

（総合交流部）

# ◆「JENESYS プログラム（JENESYS2.0 / JENESYS2017）」参加者の感想

日中青少年交流事業「JENESYS プログラム（JENESYS2.0 / JENESYS2017）」の一環として、2017 年度に来日した中国の高校生や青年、交流に参加した日本の高校生、中国への派遣事業に参加した日本の青年の感想（一部抜粋）をご紹介いたします。

## ＜中国高校生訪日団＞

東京都立翔陽高等学校訪問・交流

○一番印象深いのは、日本の学生達の熱意と友情だ。1 日の交流が終わり、千葉県立船橋古和釜高校の学生達が、皆でアーチを作って見送ってくれた。アーチを抜けると桜吹雪が撒かれ、バスが動き出した後もずっと追いかけてきてくれた。とても心に残り感動した。私は今後、人と付き合う時、熱意ある真心を持ちたいと思った。

○この訪日活動に参加できて、とても嬉しい。この活動を通し、大いに刺激を受けた。学校訪問で印象的だったのは部活動だ。皆生き生きとして面白そうだ。自分の興味ある部活動を選び、情熱を持って打ち込む。このような部活動には団結力と瞬発力があり、とても憧れる。

日本の街を歩いていて、何か変だなと思ったら、ゴミ箱がない！でも道路は本当にきれいで、ゴミ一つない。だから私は“ゴミは持ち帰る”習慣にした。この考えを家庭やクラスに広げたい。そうすれば、生活環境がもっと美しく清潔になるだろう。

○今回の訪問で最も印象深く感じたことは、1 泊 2 日のホームステイだった。私達はホームステイ先の家族と交流し、伝統的な祝賀行事に参加させてもらい、神楽を見学した。この間、家族の人は私達を自分の娘と同じように扱ってくれた。私にとって最も印象深い出来事だった。帰国したら、私は友人や同級生に日本の人の温かさと友好的なことを伝えたい。そして日本の人との交流を深め、中日友好交流に貢献したいと思う。

○日本といえば“畦道に紅の桜、池端には緑の柳”といった美しい景色が目に浮かぶ。12 月 5 日、私は中国高校生訪日団の一員として、ずっと憧れだった日本へ飛んだ。この 9 日間、日本人の優しさや温かさを肌で感じた。

東京から鹿児島へ行く飛行機から見た真っ白な富士山は壮観だった。鹿児島では湾を挟んで白い噴煙を上げる活火山―桜島が見えた。初めて火山の温泉にも入った。いずれも一生の思い出だ。12 月 8 日、鹿児島県立鹿屋工業高校を訪れた。期待と緊張のバスの中、私は日本の高校生に好印象を残したいと思っていた。車窓から見える山々の木々に時折楓の赤が映え、思わず学校近くの名勝梅湖を思い出した。八大山人記念館の真っ白い塀が緑の木々や赤い花々に映える景色と似ていて、緊張していた気持ちが次第に落ち着いた。

鹿児島県立鹿屋工業高校
訪問･職業科交流

校門を入り、鹿屋工業高校の皆の眩しい笑顔に感化された私は、すぐに打ち解けていった。私は男子ばかりの機械科に振り分けられ、彼らが製作した簡易式電動平衡車を見せてもらった。私達の学校の工業ロボット専攻と同じような感じで、今後、機械科の皆さんが私達の学校の機械電気部を訪問する機会があれば、きっと双方話題が尽きないだろうと感じた。驚いたことに機械科の授業の中に調理実習があるのだ！

わずか 1 日の学校交流だったが、日本の高校生と友達になり、プレゼントと連絡先を交換した。今後どれだけ離れても心はずっと繋がっている。

○今回訪問した熊本県立熊本西高校で、日本の高校生と一緒に英語と家庭科の授業を受けた。料理が全くダメな私は、日本の高校生に手取り足取り教えてもらい、ついに熊本のご当地おやつが完成した。一緒に労働の成果を味わいながらお喋りして、すごく楽しかった。

愛知県立東海南高校のバレー友善試合もすばらしかった。学び合い、技術を磨く、そのファイトある姿勢からも私は匠の精神を感じた。匠の精神はいたるところにある。物事を真剣に徹底的に取り組み、妥協せずに完璧を目指す心こそ、匠の精神なのだ。

### ＊交流に参加した日本の高校生の感想

〇正直、日本と中国の繋がりはあまりよい訳ではありません。だから中国高校生が学校に来てくれるのは嬉しいと思った反面、不安な気持ちもありました。しかし、実際に当日会ってみて、中国高校生はみんながとても積極的で、私達日本人にはないものをたくさん持っていると感じました。同じアジア、隣の国、漢字を使う…等たくさんの共通点がありますが、文化は大きく違うことを中国高校生からたくさん学びました。同じ高校生でも価値観が違ったり、いろいろな物に対して見る見方が両国で違っていたり、普段の生活からは経験できないことを体験することができ、とても嬉しかったです。また、私のクラスに来てくれた男の子が、「正直僕も国同士の仲はあまり良くないと思う。でも、こうやって僕たちが仲良くできるのだから、今から僕たちの世代でそれを変えていこう。」と言ってくれた時、本当に感動しました。このような素晴らしい機会を与えてもらったおかげで、私の考え方も変わりました。この交流を企画してくださって、本当にありがとうございました。感謝しています。

〇私は、中国の高校生と交流する前、楽しみと不安でいっぱいいっぱいでした。まず、私は英語が苦手です。テストで良い点を取れたことがありません。だから、すごく不安でした。実際交流することになり、私は１人の女の子と話しました。その子はとてもフレンドリーで、すごく話しかけやすく、あっという間に仲良くなれました。私のカタコトで変な英語を彼女は目を見て笑顔で聞いてくれて、私にもわかるようにジェスチャーをまじえて話してくれました。

彼女とはたくさん話せました。将来の夢を話した時、「それは難しいことだけど、あなたらしいし、とても素晴らしい夢だと思う。応援してる、がんばってね。」と彼女は言ってくれました。英語だったのに、その言葉は、私にすんなりと入ってきました。初めて会ったし、初めて話したのに、彼女を姉のように感じました。そして彼女の言葉は、私を温かくしてくれました。今、ニュースで取りあげられる中国の情報は、中国人のマナーの悪さばかりです。ですが、中国人が全員マナーが悪いわけではありません。これは関わってみなければわからないことかもしれません。私達はニュースで伝えられることを、信じすぎている面があります。ですがそれは 100％ではない、彼女のようにマナーの良い、素敵な中国人だっています。

私は、中国の高校生と、彼女と交流することができて本当に良かったです。これからも、外国の人と、ふれあう機会があれば、積極的に話してみたいです。

### ＜中国青年代表団＞

〇今回の訪日を通じて、日本の農村振興策である“六次産業化”戦略を知った。また、“六次産業化”の推進におけるいくつかの効果的な手法や対策も学んだ。さらに重要な学びは、いかにして若者をひきつけ、農村回帰させるかの手法である。学び、感じたことはとても多かった。中国の農村も同様の問題に直面しているからである。日本の手法のいくつかは、まさに我々が参考にし、取り入れる価値のあるものである。

### ＜第二十二回中国教育関係者代表団＞

〇とても心に残る数日間の訪問だった。特に印象深かったのは、日本の特別支援教育システムのことである。特別支援学校のほか、特別支援学級、通級指導教室があり、障害の種別や状態によって区分され体制化されていた。

とりわけ、特別支援学級と通級指導は参考になったし、我々も取り入れてみるべきだと感じた。特別な支援を要する生徒に向けた、その子に合った教育を受けさせられると同時に、健常な生徒らと触れ合い、交わる機会も多く持たせることができる。その上、健常な生徒にも、障害を持つ生徒に対する直観的な理解を促し、互いの共生や平等について考えさせることができるものだからだ。

日中教員同士の懇談
（大阪市立大阪ﾋﾞｼﾞﾈｽﾌﾛﾝﾃｨｱ高校）

私自身は特別支援教育の教員ではないが、平等の実現や他人への尊重、自分に自信を持つこと、偏見や差別をなくすこと、そしてより良い人間関係を築くこと、これらのことは皆、教育が目指す目標にほかならない。台東区立柏葉中学校で人権教育がカリキュラムに組み込まれていたように、また文部科学省のブリーフにもあったように、子どもたちにどう社会や世界と深く関わり、より良い人生を築いていくかを学ばせること、それが中日両国における教育の目的なのである。

## ＜中国青年メディア関係者代表団 /テーマ：少子高齢化・科学と発明＞

柴又帝釈天門前参道商店街での
自由取材

○約 1 週間の滞在中、巣鴨地蔵通り商店街で自由取材を行い、日本の高齢者の元気な暮らしを感じた。和気あいあいとした生活への活気と生きることへの情熱が、高齢者たちに生活の楽しみをもたらしている。日本人の長寿の重要な要因は、精神面での若さであろう。当然ながら、老後の負担が比較的軽いことも、高齢者たちが生活に満足できる大きなプラス要素である。

ボナージュ横浜の視察では、スマートサービスが老後の暮らし方を変えられると感じた。中国では現在“国のレベルで主導し、コミュニティが主となり実施する”方式の、居宅での老後生活を推進しており、ボナージュ横浜の手法からもいくつかの実績が参考にできる。例えば、より一層のスマート化やヒューマンケアに配慮した住宅デザイン、シニアコミュニティに対する管理モデルなどである。この分野は、中国も今後 20 年から 50 年の間、著しく発展するであろう。

島根県邑南町の訪問では、子育て支援への行政施策の視察を通じて、自治体が資金援助や優遇措置などの福利施策を行い、人口増加を期待し奨励していることを知った。

少子高齢化による人口面での社会問題、例えば就業や不動産などの問題は、日本や中国のように人口の多い国では、今後の発展において必ず直面し、且つ解決しなければならない問題である。短期間の視察を通じて、感覚的な認識を得られた。より良い解決方法は、帰国後に研究を重ね、観察と思考を重ねる必要があるだろう。

○朝日新聞社と神戸新聞社の視察では、異なるメディアの気質と、共通したジャーナリズム精神を感じた。朝日新聞社では、全国的なメディアとしてきちんと管理された運営の下での謹厳実直な雰囲気を、一方の神戸新聞社では地域との密接な結びつきを感じられた。しかし両社共に、新聞のメディア人としてのプロ意識と新聞事業の中で絶えず何かを追求しようとする姿勢がひしひしと伝わり、深く印象に残った。特に、神戸新聞社の、阪神大震災後も休まず新聞を発行し続けた不屈の精神には、同じような大震災を経験してきた私達にも大いに共感するものがあった。

山形県工業技術センター視察

○「科学と発明」のテーマに沿った訪問では本当に多くの成果を得た。全体を通して、日本人は真摯に事に当たり、規則に従い、民族の文化に強い誇りを持っていると感じた。まず感じたのは、「民から得たものは、民に使う」ということだ。東京や山形県鶴岡市の科学技術機関への視察・交流を通し、各地に地域の特色ある資源や優位性のある産業が存在することを学んだ。地域の科学研究機関はそれらを生かすべく、伝統的な開発や生産モデルに縛られることなく、現地政府の計画や支援に基づき、日々拡大する住民のニーズや市場の発展状況を鑑みながら、技術改良や品質向上を行い、人々の生活の質を最大限向上するよう努めていた。

次に、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えている」と感じた。日本政府は科学技術研究の人材育成を重視し、継続的な研究開発の展開に向け、長期計画と目標を設定していた。学生に向けて一連の関連活動を展開し、選抜制度を導入して学生の興味を刺激し、研究開発を奨励するため素晴らしい環境を作り出している。

そしてホームステイでは、ご家庭から温かく迎え入れて頂き、異国でぬくもりと優しさに触れることができ、とても感動した。

## ＜中国社会科学院青年研究者代表団/テーマ：グリーン経済＞

○中日国交正常化 45 周年となる 2017 年に中国社会科学院青年研究者代表団に参加できたことは、私にとって非常に意義のあることだ。グリーン経済というテーマのもと、大学院や研究所、同テーマに取り組んでいる代表的な企業を訪問でき、収穫の多い旅になった。

日本滞在で気づいたことを携帯にたくさんメモしている。日本人の教養の高さとマナーの良さは、確かに私達が学ぶべきところだ。グリーン経済の発展については、企業の取り組みでいうと、京セラのハイレベルな汚水排

出の仕組みが印象に残っている。芝浦水再生センターの汚水処理と資源の再利用の方法、周辺環境の改善、省エネ・二酸化炭素排出量を削減したオフィスビルは、参考にできるものばかりだ。また、代表的な産業研究機関として、排出削減した二酸化炭素の貯留やバイオテクノロジーに力を入れている地球環境産業技術研究機構を訪問した。大規模な資金の投入は、グリーン経済の発展に対する日本政府の強い決意と自信の表れである。一般市民の方々と触れあうことのできた生活の分野では、水に溶けるトイレットペーパーや低排出ガス車、ホテルの入り口に設置された傘袋の器械などが印象的だった。日本は技術開発や環境保護の意識において、いろいろなところで進んでいると言える。

中日は友好的な隣人だ。小異を残して大同に就き、ともに学び合い、発展していくべきであり、これこそ両国がともに抱いているビジョンだ。機会があればもう一度日本に来たい。

## ＜日本青年メディア関係者訪中団/テーマ：医療・教育）

中国国際放送局訪問・交流（北京市）

〇13 億人にもおよぶ人口を抱える中国で日本とは異なるものの“公的保険”制度なるものが存在すること自体にまず驚かされた。

また、南京で訪れた病院では 1 日 1 万 5 千人もの患者をさばくための自動化されたシステム、中医薬大学では多くの学生に教えるための遠隔中継システムなど、とにかく巨大な人口のボリュームに対応するためのシステムが整えられていた。鎮江の地域衛生サービスセンターは、日本であれば診療所といった類になるかと思うが、設備は CT なども整えられ、とても診療所とは言えず一般的な病院といっても過言ではない。

そして、中国でも日本同様に“高齢化”の問題に直面していて、一人っ子政策が拍車をかける。こうした部分では日本とも協力できる部分があるのではないだろうか。

報道機関にも訪問させてもらった。中国国際放送では実に 65 言語によるラジオ放送を行っている。相手の母国語で中国の文化を発信できる力には圧倒された。日本として海外に自国の文化などをどのように発信していくか、現在外務省などが担ってはいるが、それだけでは足りない状況で、我々マスメディアが協力して進めていく必要が迫られていると強く感じた。

〇都市部と農村部との格差是正、教師の質向上、教師主導の授業から生徒主体の学習への転換などを通して、大国の未来を切り拓く人材を育てていこうという“本気度”が感じられた。

教師の創意工夫に基づく教材研究や子ども目線に立った授業づくりなど、教育の質という面ではまだ日本に一日の長があるだろうが、中国の GDP に占める教育費割合は日本を上回っている。日本でも今まさに学習指導要領の改定や大学入試改革を進めているが、うかうかしていると、後発国の中国に追いつかれ、抜かれるのではと危機感を覚えた。指導者のトップダウンで物事を進めていく国のスピード感、ダイナミズムも感じた。

杭州市建蘭中学訪問・交流

職業系の学校や青少年育成センターの視察では、ものづくり教育の質の高さに度肝を抜かれた。ロボット制作やプログラミング、3D プリンターなど、どの分野でも設備に恵まれ、すばらしい教育環境だと感じた。「コピー商品」だけでなく、オリジナリティーあふれる商品、製品を生み出す土壌づくりが進んでいる印象を受けた。

昼食時、また夕食時の中国人スタッフとの交流が何より思い出深い。正直、訪問前は中国という国、また中国人にネガティブな印象が先行していた。しかし、酒を酌み交わし、コミュニケーションを深めると、当然といえば当然だが、日本の同世代の若者と何ら変わらず、仕事への真摯な向き合い方や人間としての優しさに心打たれた。異国の地に「友人」ができるとは、訪中前は考えてもみなかった。日々、記事で「異文化理解」「国際交流」といった言葉を何気なく使っているが、今回、そうした言葉の意味・意義を肌感覚で学べたような気がする。

私は地方紙の記者として、教育問題や学校の話題を中心に取材・執筆している。中国の教育の実情や課題、方向性などを紙面で紹介することで、日本の教育関係者にわずかばかりでも参考になればと思うし、中国に対する理解が進む契機になればと考えている。（総合交流部）

## ◆「JENESYS プログラム」アンケート

2017 年 6 月～2017 年 12 月実施分

「JENESYS プログラム」のうち、「JENESYS2017」参加者 712 名のアンケート結果（回答率 99.9%）の一部をご紹介します。

**1. 今回の訪日で印象に残ったこと（3 つ選択可）　※上位 3 位**

| | |
|---|---|
| 日本の社会・マナー | 84% |
| 歴史・伝統文化 | 58% |
| 日本の経済（生活水準, 日本の産業, 商品・サービス） | 47% |

**2. 訪日中にＳＮＳで何を発信したか（複数選択可）　※上位 3 位**

| | |
|---|---|
| 歴史・伝統文化 | 67% |
| 日本の社会・マナー | 64% |
| 日本の経済（生活水準, 日本の産業, 商品・サービス） | 45% |

**3. 日程全般について、改善した方がよいと思う点は？**

| | |
|---|---|
| ある | 28% |
| ない | 72% |

**4. 日程全般について、主な改善点（記述式）　※3. で「ある」と回答した人**

- **日程・プログラムに、もっと時間のゆとりが欲しい**
  - ・視察箇所は多くなくても、1、2 か所をじっくり理解できればよい。駆け足の見学では正確に状況を把握できない。
  - ・昼食以外にも午後に休憩の時間を設けたり、滞在日数を長くするなどして、テーマの掘り下げや質疑応答、交流ができるとよい。
- **交流の機会をもっと増やすとよい**

（専門の分野・テーマでの交流）
- ・日本の若手研究者や日本の学術界との交流。
- ・代表団のメンバー同士での交流や情報交換。

（一般市民との交流）
- ・一般家庭の訪問、個人同士の相互交流。
- ・ホームステイなど、一般の日本人と交流できる機会・時間。

（学校交流）
- ・見学を減らして、学校交流の時間を増やす。
- ・とても楽しかったので、もっとたくさんの学校を訪問できたらよい。

- **日本の生活や文化、歴史について、もっと理解を深めたい**
  - ・団員に来日経験者を含めることができれば、初来日の団員でも 8 日間の滞在で日本に対するイメージを形成やすく、より深いレベルで交流できる。
  - ・日本人の生活を知る機会があるとよい。
  - ・国立博物館の見学など、日本の文化についての紹介や伝統文化・民俗に理解を深める機会があるとよい。

**5. 個人または参加者同士で計画している訪日経験を活かした行動（記述式）**

- ・職場で報告会を開き、日本訪問について情報をシェアする。
- ・微信や微博で今回見聞したことを伝える。
- ・レポートを学校に提出して今回の活動を報告する。
- ・日本文化についての番組を制作したり、文化比較、在日中国人の生活のドキュメンタリーを制作したりしたい。

・スピーチ大会に参加する。
・日本の省エネや排出削減分野の技術とその普及状況に注目したい。
・家族や友達に日本への旅行を薦めたい。
・家族や友人とまた日本を訪れて、日本文化についてさらに理解を深めたい。
・今回知り合った日本人と連絡を取り合い、彼らに中国文化を紹介したい。
・今回知り合えた、たくさんのメディアの同業者である団員と、今後も SNS で連絡を取り合い、今回の旅行の感想をシェアしたい。

**6. 今後、日本との関わりについて関心があること（複数選択可）**

| | |
|---|---|
| 日本語・日本文化の学習 | 87% |
| 日本への留学 | 22% |
| 研究者として日本について専攻 | 11% |
| 日本企業への就職 | 10% |

**7. 将来、日本との関係を、個人的にどのように発展させたいか（複数選択可）**

| | |
|---|---|
| 訪問先で出会った人との繋がりを維持 | 81% |
| 活発な文化，学術，科学，スポーツ等の交流の推進 | 74% |
| 自国との政治的・社交的繋がりの強化 | 17% |
| 防災・災害対策の協力の推進 | 13% |

**-訪日をきっかけに、身近なことから日本との繋がり発展へ-**

「日本の社会・マナー」は多くの団員にとって印象に残っただけでなく、過半数が訪日中に SNS でも発信しています。「歴史・伝統文化」「日本の経済」も同様で、印象深いものほど活発に情報発信される傾向がうかがえます。

プログラムの満足度としては、日程全般、視察・訪問先での交流ともに 7 割が「改善した方がよいと思う点はない」と回答、比較的高い評価が得られています。一方で 2～3 割が挙げた改善点（記述式）も示唆に富み、限られた日程でもじっくり日本や日本人に対峙したい思いの強さが込められていました。

「JENESYS2017」の団員は、参加条件として、滞在中または帰国後、本プログラムへの参加経験や日本の魅力等の情報を広く共有できるよう、対外発信を行うことが求められています。その具体的な計画では、主に報告会やレポート提出による職場や学校への報告、家族や友人へ旅行を薦めたり共に日本を再訪したりすることが挙げられました。さらに番組制作やスピーチ大会への参加など、専門分野や特技を活かしたユニークな発信も各団で計画されていました。多くの回答からは、SNS やインターネットを情報インフラとして活発に使いこなしている様子もうかがえ、新しい情報等を収集し柔軟に取り入れるのが得意な国民性が反映されていました。

また今後、7～8 割が「日本語・日本文化の学習」に関心を抱き、「訪問先で出会った人との繋がりを維持」、「活発な文化、学術、科学、スポーツ等の交流の推進」を通じて日本との関係を発展させたいと回答しており、身近に実践できることから積極的に関わっていきたいという傾向が顕著でした。

以上の参加者からの“声”をふまえ、当会館では日中の若者が存分にふれあい、より理解を深めることのできる機会を提供できるよう、今後も尽力してまいります。

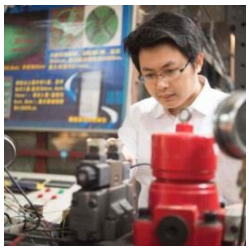
（総合交流部）

後楽寮 koRakuRyou

# 留学生通信

## 日本の長所と短所

東京工業大学大学院博士課程
（理工学研究科土木工学専攻）　姚超凡



日本に留学して 3 年が経ちました。日本社会と教育についてわずかながら理解していることを記します。

〈長所〉

1. 道路が清潔である。東京のような大都市ではなく、地方でも基本的にゴミ箱がない。ゴミは自分で処理するからだろう。日本は環境保全を大変重視しており、重工業が少ない。また、海洋性気候により、濃霧が出現しにくいのだろう。
2. 礼儀正しい。日本人は礼節をわきまえ、人に迷惑をかけることを最も嫌う。人に出会うとお辞儀をし、上品で礼儀正しい。
3. 科学研究の継続性が保たれている。日本では多くの研究課題がおそらく何十年から百年くらいの期間で、研究され続けている。大学教授の給料も高く、人から敬われ、安心して研究に専念することができる。

〈短所〉

1. 生活費が高い。これは東京に来て一番の印象だ。総合物価指数は自分の故郷、成都の 2.5 倍だ。しかし都内のマンション価格は特別高いと感じない。
2. ストレスが多い。日本にいるとストレスをずっと感じる。日本は人と人との関係が中国に比べ冷淡である。東京の部屋が狭いことも原因の一つだろう。
3. やることが敏捷性に欠ける。日本人はすべて規則に従っている。自分の頭で物事を考えることがない。仕事は効率性に欠ける。

当然のことながら、それぞれの国に長所と短所はある。やはり私はこの留学生活で多くの収穫を得た。

## 第 21 回「日中学院倉石賞」候補推薦のお願い

日中学院では初代院長である倉石武四郎先生を記念した基金により、「日中学院倉石賞」を設けています。

第 21 回「日中学院倉石賞」の候補として、中国語教育や日中の民間友好交流に尽くされた団体・個人のご推薦をお願い致します。

### 推薦要項

対　象　〇民間中国語教育の普及・向上および日中文化交流などに貢献した個人・団体
〇中国語の教育、研究、翻訳などに関する業績・著書・論文
（在日本、中国を問いません）

提出書類：日中学院倉石賞推薦書
（HP よりダウンロードし、郵便またはメールにてお送り下さい）

募集締切：2018 年 8 月 20 日㈪まで

発　表：2018 年 9 月中旬

授賞式：2018 年 11 月下旬（予定）

＊受賞者には賞状と賞金が授与されます。

【問合せ】日中学院 倉石賞係
http://www.rizhong.org/
電話：03-3814-3591
E-mail：info@rizhong.org

# ● コ ラ ム●

## 日中平和友好条約締結 40 年に思うこと

(公財)日中友好会館 顧問　武田 勝年

5 月 10 日㈭、ホテルニューオータニで開催された李克強中国国務院総理の歓迎レセプションに参加した。李克強総理にはテレビ以外で接する機会がないので、直接見たいという野次馬根性と会場で日中の老朋友の皆さんの元気な姿に接したいという思いで出向いたものだが、思った以上に心地よいひと時を過ごすことが出来た。昨今の国際情勢の変化や日中両国政府の思惑を反映して、会場は終始和やかな歓迎ムードに包まれていた。榊原定征経団連会長、河野洋平日本国貿促会長、安倍晋三総理がそれぞれ前向きのご挨拶をされたが、李克強総理のご挨拶は、現在の気持ちを率直に出して参加者に話しかけておられることが感じられ親近感を持つことが出来た。特に最後の一言、「ここで私はグラスを挙げて乾杯するが、会場の皆さんはスマホで撮影し、その映像を世界中に発信して両国の良好な関係を世界各国に伝えて頂きたい。」は印象的であった。

今年は日中平和友好条約締結から 40 年。私は 1977 年に初訪中して以来、商社マン或いは団体役員として時期によって多少の濃淡はあるがほぼ一貫して中国と向き合い、中国の改革開放の動向を観察し、両国関係の起伏を肌で感じてきた。両国間には、「歴史問題」「領土問題」「台湾問題」という重い課題が横たわっており、双方で親近感を感じない国民が圧倒的に多いという現実の下で、久しぶりに感じるこの歓迎レセプションの温かい雰囲気、即ち日中急接近の背景は何だろうかと頭の体操をしてみた。以下に列挙して諸賢のご批判、ご指導を仰ぎたい。

(1) 米国トランプ政権の、貿易赤字に加えて安全保障、知財権問題を絡めた対中強硬姿勢に対処する際に、日中両国には共通する利害がある。
(2) 昨年 10 月の共産党大会、本年 3 月の全人代を経て、共産党による統治が強化され、習近平政権は国内対応に自信を持っている。
(3) 朝鮮半島の非核化と安定のために日中両国の協調が必要である。
(4) 日本のアニメは従来から中国で受け入れられているが、昨今日本の匠の精神が注目され、激増している訪日観光客が中国に持ち帰る生情報が巷間に広がりつつある。
(5) 日本政府の対中政策が、中国の事情を理解し、柔軟に対応しようとする姿勢に変化している。

これからの 30 年、中華人民共和国成立 100 年までの間、日中両国関係はどのように変化、発展或いは沈滞するのか興味は尽きない。

半瓶醋
理事長のコラム

# 米中貿易交渉と米朝首脳会談

(公財)日中友好会館 理事長　荒井 克之

孔子の文章と言葉のほとんどを暗誦することができた孔子学者の父から初期教育を受けた内村鑑三(1861－1930 年)は、“孔子と孟子を世界に与え欧州人の夢想さえしなかった数世紀前に羅針盤と印刷機を発明した中国”を高く評価していた。

内村は、米国が 1882 年に施行した Chinese Exclusion Act(中国人排斥法)に大きな憤りを感じ、強烈な反対を唱えた。米国がこの法律を施行したのは、“中国人が彼らの貯蓄をすべて故郷に持ち去るので米国が貧しくなっている。また中国人はその低賃金によって米国人労働者に損害を与える”と言うのが大きな理由だったようだ。

これに対し内村は、“中国人は鉄道をロッキー山脈に切り開きカリフォルニアでは葡萄園を栽培し灌漑もした。彼らは持ち去る金銭と等価値の仕事を後に残しているではないか。また、低賃金云々は労働に課せられた保護貿易制度だとして、中国人のような柔和な不平も言わない、しかも勤勉な労働者を米国中の何処に見つけられるのか”と反論していた。(『余は如何にしてキリスト信徒となりしか』岩波文庫)

その時から 186 年後、今は世界の大国となった中国が展開している米中貿易交渉の報道から見ればそんな大むかしのことを持ち出す必要は全くないのは明らかである。

5 月 23 日の読売新聞朝刊一面では、22 日に中国側は自動車の輸入関税引き下げを発表した。17 日から 19 日に行われた閣僚級協議では、中国が米国の農産品やエネルギー輸入を大幅に増やすことで合意したことを米国が評価し、米国は中国通信機器大手への制裁を緩和する方向で、これにより知的財産権の侵害を理由に検討していた中国への制裁関税の発動を当面見送ることになりそうだと報じられていた。

しかし米通商代表部のライトハイザー代表は中国に進出した米企業に対する技術移転の事実上の強要をやめるなど中国に抜本的な構造変化が必要だと指摘している。一方中国は劉鶴副首相が、輸出国は商品とサービスの競争力を高め中国人に買いたいと思わせなければいけないとクギを刺している。これから具体的な協議に入ることになるだろうタフな米中交渉から目が離せない。一方、G7 財務相・中央銀行総裁会議ではフランス財務相が、米国は今やG6 プラス 1 とか発言したようだが、世界史の転換点になるかもしれない史上初の米朝首脳会談を迎えるかも知れない時期に経済問題であまりヒートアップしないほうが世界にとってはよいかもしれない。

# 会館行事と人の動き　5/１～31

## ● 会館行事

5/ 7～5/11 ▸貸美術館催事「楊爾書法作品展」
5/ 9 ▸後楽会春季友好バスハイク（栃木県方面）
5/17 ▸後楽会気功・水墨画教室、中国旅行説明会
5/18～5/23 ▸貸美術館催事「花香鳥語・中国画家鮑鶯作品展」
5/20～5/27 ▸「日中植林・植樹国際連帯事業」2018 年度中国社会科学院青年研究者代表団第１陣来日（5/21 同団歓迎会）
5/21～5/25 ▸日中協力代表団　来日
5/25～5/28 ▸貸美術館催事「王正春“敦煌遺墨”書道世界巡回展」
5/30～6/ 3 ▸貸美術館催事「日本の風景 - 鄧予立写真展」
5/31 ▸後楽会気功・水墨画教室

## ● 来館・訪問・面会

5/16 ▸文京区アカデミー推進部国際交流担当 中根崇主査　来館（留学生事業部）

## ● 行事参加、その他の活動

5/10 ▸李克強中国国務院総理歓迎レセプション（江田会長、宮本副会長、荒井理事長、鄭理事、武田顧問）
5/12 ▸北区日中友好協会 日中友好促進懇談会（後楽寮生、留学生事業部）
5/22 ▸中国文化センター「友誼の道～池田大作と中国展」開幕式（荒井理事長）

## 寄附のお願い

後楽寮運営に対するご寄附によるご支援をお願い致します。

◇目的

当公益財団が運営する後楽寮は、中国人留学生、研究者の寄宿舎であり、1985 年に建設されました。約 4 千名の寮生 OB は中国各地及び日本で活躍し、両国の相互理解促進と安定した関係構築に大きな貢献をしております。彼らの留学生活を支援し、日中の架け橋となる人材を養成します。

◇寄附金の使途

(1)寮生の生活環境の整備
(2)寮生の対外交流活動支援
(3)寮生自治活動支援
(4)後楽寮生 OB 会活動支援
(5)その他必要な支援

後楽寮

◇寄附の方法

下記口座宛、銀行振込でお願い致します。

三菱東京 UFJ 銀行　神楽坂支店（店番 052）　普通預金
口座番号　００９１５７０　　口座名　公益財団法人日中友好会館 理事長 荒井克之

＊振込手数料は当方で負担いたします。払込取扱票を送付いたしますので、ご連絡ください。

寄付額　個人の場合　一口　1 万円
　　法人の場合　一口　10 万円

当公益財団は、所得税法施行令第 217 条第 1 項第 3 号及び法人税法施行令第 77 条第 1 項第 3 号に掲げる公益財団法人であり、寄附は、税法上の控除対象になります。領収書を発行致しますので、寄附者のお名前、ご住所等をご連絡下さい。

【照会先】公益財団法人日中友好会館 総務財務部　電話：03-3811-5317　FAX：03-3811-5263
【留学生寮に関するお問合せ】留学生事業部　電話：03-3814-1261　FAX：03-3814-8383
E-mail：houleliao@jcfc.or.jp

2018 年 7 月 1 日発行　第 349 号
発行　公益財団法人 **日中友好会館**
〒112-0004　東京都文京区後楽 1 丁目 5 番 3 号
電話(03)3811-5317　FAX(03)3811-5263
http://www.jcfc.or.jp/